

小學修身書

初等科之部

卷四

T1A1

22

(MO24)

明治十六年六月印行

初等社印

# 小學修身書

文部省編輯局



## 小學修身書卷之四

### 第一章

凡そ世間ふ何る人。貴きとふく。賤しきとふく。父母の生まざる人やある。されバ。父母ハ我が身の本あれば。本をば忘るまどきとあり。況や養育の恩。山よりも高く。海よりも深く。以てぐして忘る

べき。六諭衍義大意

今孝心不本づらんとならば。父母の恩  
哉よくく思ふべし。幼穉のなごい。父  
母とも不。晝夜艱難辛苦をいとせず。常不  
阿らき風をもいとひて。抱きそだて。少  
しも病ひありて。煩はしくれば。我が身  
もかまをりなきなど思ひ。たゞ子の息  
災ふして。成長するを待つより外は。何

の願ひうある。其子稍こおとふしくな  
まき。其をぬふ師をえく。び。藝を習はせ。  
よき人もたれのしと思ひ。又世り立  
ちまぐをるを見たり。或いあしき友不  
も引かき。或い不慮の難ふも逢はんか  
と。未だ目不見えぬとまをも。断えず心  
ぐるしく思ふかど不。すべて一生の以  
せふ。何事の子のたえせぬとやあ

る。以て其の時か。子を思をぬ時やある。  
是等の厚恩。たとひ報トつくさずとも。  
せめて孝行ふして。養ふべきことあり。同上  
多し。一たび失ひて。再び得べし。ならざる  
もの。父母あり。人。女子たるもの。是を  
思をぬ。以て孝心をおこさざるべき。  
同上

## 第二章

兄弟ハ。かゝるち分られて。兄とあり。弟と  
なるといへども。其源を尋ぬまば。父母  
より出でたり。故に幼少の時分を。父母  
兄弟の子供を。右の手左の手。携へ。引  
きつれ。歩き給へば。兄弟の子供も。或ハ  
父母の襟。不取りつき。裾。不さがりて。相  
共。不付き。傍ひまをり。物を食ふ。よも。兄  
弟。一つ所。よて。食し。衣類をも。兄弟を。差

別なく。替へ合ひ衣るともあり。手習ひ  
學文するふも。一度ふ並び。遊び歩くも  
も。連ま立ち行くあり。斯くの如く幼少  
の時ハ。兄弟一體の如く親しむれども。  
各々年たけて。以つとなく。親しむ薄  
くありゆくなり。道は志しあらん人ハ。  
兄弟の親しむ。大切ふす。極きことなり。  
大和  
小學

世間の人乃習ひ。我が弟ふハ。我よりよく  
弟の道をふし。はのへよと。求むまごも。  
我又我が兄ふ事ふる道を。志らばなり  
ゆくあり。我よりよく兄ふ事ふる道を。はく  
してこそ。又我が弟も。我よりよく事ふべ  
けれ。我が身ふ道を行はずして。妄りふ  
弟をせめ教ふるも。君子の道ふあるべ  
からば。大和中庸

弟ハ。悌を以て兄ニ事ふる道トシ。悌を敬ひ従ふ徳ナリ。他人の年老い位高きニ事ふるも。同ト理あり。他人不くも老いたるを敬ふハ。道理の當然あり。まづ親の身を分けて。我ニ先ふるちて生まきたる兄を敬ひ従ふト。勿論の理ナリ。兄ハ。恵を以て弟を帥ゆる道トす。恵ハ。友愛の二義を包ねたり。愛ハ。親の子を

愛するガ如クシ。懇ニ親シむをいふ。友ハ。友達の互ニ切磋琢磨するガ如ク。道を教へ。過ちを正し。至徳を明かす。まゝるやうシ。善を責むる状イフ。翁問答

### 第三章

司馬温公乃のこまひハ。婿をこり。妻を娶るの法ハ。先の家の富貴貧賤ハ。まゝに。女の方よりハ。婿の徳行を

其家の作法に於て吟味して、心不適ひか  
ぞ。たとひ以上の程貧しき人ありとも。取  
り結ぶる。徳行勝またる婿あらば。た  
とひ當分貧しくとも。終ふに富み榮ゆ  
べし。若し愚鈍なる婿ならん。當分い  
程富貴ありとも。後よに必おちぬる  
べし。妻を娶るも。此道理なきに。若し徳  
行ふかまひば。妻の家の富貴あるを求

めて迎ふまじ。婿乃家の貧しきを驕り  
て舅姑ふも事へむ。其夫をも輕んじて。  
驕りたるふる心を。不にまゝふして。  
其家やのほらぬものあり。よしたと  
ひ妻の寶ふて。其家富に榮ゆやも。男と  
生まれたらん程のものを。恥づべきと  
ふあらずや。大和小學  
夫は。和義を以て妻をいざあふ道とす。

和ハ親ト和合する徳あり。義ハ道理  
ニ從ひてさ以なんし。非道をえらびま  
つ不徳なり。翁問答

詩云なく。寡妻不刑里し。兄弟に至り。  
以て家邦を御む。詩經

妻ハ順正の二徳を以て。夫小事ふるを  
本やす。順を心だて柔順ふ。そのいひ顔  
ぶり。立ちぬるまひほども。やをらかふ

從ふ徳なり。正ハ義理作法を正しく守  
る徳なり。翁問答

詩云いく。桃の夭々たる。灼々たる其  
華。この子よ。不歸ぐ。其室家不よろし。  
詩經

夫婦の存のみだり。いいて。禮儀不  
々れば。その家をさほらばして。父子の  
あひだも。ふしぐりなるものあり。夫



婦の禮儀さへ。たゞしくやうのくを父  
子のあひだも。相志くく。たゞひ小義  
理をおもひ。禮儀たゞしくなりてよる  
づ乃志と。やまらふやうのふる。和  
小學

家をよく保つと。よく保たざると。夫  
の徳不徳のふらば。又妻の行ひの  
善惡ふよれり。古人家貧くく。良妻

を思ふといひ。人も空なり。夫の外を  
治め。妻の内を治むるが職分あり。夫よ  
く勤儉なきごも。妻も放逸ふ。怠りて  
勤めず。驕りて儉約あざれば。家を保  
ちづ。家道訓

女子ハ。我が家不在りて。我が父母り。  
専ら孝を行ふと。わらあり。去まごも  
夫の家は行き。専ら舅姑を我が親

よりも重んじて。厚く愛し。敬ひ。孝行をほくすべし。親の方を重んじ。志すことの方を輕んじ。るをたのめ。舅姑の方。朝夕の見舞ひを。闕くべからず。舅姑乃方の勤むべき業を。怠るなからず。若し舅姑乃命あらば。慎み行ひて。背くなからず。萬の事。舅姑より問ひて。其教へ。小まゝをせべし。女大學

#### 第四章

家の主となりて。三族を親しむべし。三族は。第一小父の族。第二は母の族。第三は妻の族あり。父方乃一族は。本族といふ。先祖より。同ト血脈を傳へたる者なまじ。親疏ののちありあまじ。何つく親しむべし。父の族をあつく親しむは。是又先祖へ事ふる道なり。次ぎふは。母方

の一族ハ。是父の族ハ。はぎて親しむべし。次ぎハ。妻の一族ハ。母の族ハ。はぎたり。三族を親しむ。其次第輕重ハ。くの如し。是古の法ナリ。家道訓

今の人ハ。妻の族を專ら親しみて。父の族母乃族ふりとし。輕重あるを知らず。父母への不孝あり。おろろなりといふべし。妻族を親しむべからざること。いふ

よハ。あらず。輕重の次第あるべし。同上  
親戚の間ハ。多々誠を以て交わるべし。若し我より。久しく音問をおろそかのふせば。只我が情のうすくして。疎略あるを謝まべし。餘事ハ。事よせて。いつを謝すべからば。是小事といへど。誠の道ハ。あらざれば。心術を害するをいふなり。大和俗訓

親戚不對し。財をやり取りする時。我が財を損せざるや。我が利運の如くせんとすれば。快からざるを有り。取るもやるも。我が財を少し損失する。我といざれば。何事なく。我も人も。互よふ。ちよし。家道訓

世より親類乃衰微を見つぐ人多し。されど一度り二度見つぎて。其人よく保た

ざれば。怒り腹立ちて。終ふ。他人よりも惡し疎むとも。又多し。仁者を見も。志らぬ人のあをれをだふ。一旦は。見過ぐさば。親類よあらずと。以て。速ふすつゝ。大和爲善録

父母を愛敬するを本とし。兄弟夫婦親戚に對するも。皆志するべし。各々其人の品ふより。愛敬まべし。疎むれば

も。たろそのふすべのうら。是愛有り。賤  
しをまごも。侮る。侮る。是敬あり。家  
道訓

### 第五章

むのし皇祖天照大神。天孫尊ふ詔りせ  
し。ふ寶祚のさかえまさんと。ほさふ天  
壤ごき。はまりふるべしやあり。天地  
もむかし。ふ變いらは。日月も光り。枝改

めぞ。仰ぎて尊と奉るべきい。日嗣ぎを  
うけ給ふ。皇ふなるんおをしまは。神皇正  
統記

是を以て。我が國の道乃。萬國よまを  
て。尊くめで多きを知りて。仰ぎ従ふ  
べし。まぐて物ぶとふ。根本衰へて。末葉  
さかゆる理なり。たとへを草木枝う  
るまの。枝葉を榮えしめんや。以の  
不ご撫で養ふとも。根本を忘きて。土か

ひ草ぎらぎらば。枯れ志おむが如く。世  
戎治めんごとて。以の程萬民を愛し。こ恵  
むこも。君ふ事ふる道ふ違ふ時ハ。上衰  
へ亂きて。下ふやみ困しむ。道守之標  
大海の。汐干て山ふ。なるままでよ。君ハか  
たらぬ。君ふ悔しませ。山家集  
毫釐も君をゆるがせしする心を。きざ  
すものハ。必ぞ亂臣とふる。芥蒂も親を

おろそろふまゐる形あるものを。果たし  
て賊子とふる。是の故。古へ聖人。道ハ  
須臾も離るべし。離るべきハ。道ハ  
何らぞと説けり。但し其末をまをびて。  
源をあきらめざらば。事ふ臨みて。覺え  
ざる何やまらあり。神皇正統記  
忠臣ハ。孝子の門より出づ。父母ハ。事ふ  
る愛敬の誠を推して。君ふ事へ。進んて

忠貞をほくさんと思ひ退きて君乃  
政教美事哉うけ順ひ。闕失を正し救ふ  
べし。日新館童子訓

君小事へ奉ると。必だ先づ恩を蒙りて。  
それ小従ひて。我が身の忠をも奉公哉  
も。右本由さんと思ふ人のみ侍るなり。  
うしほごまふ心得るるをあり。本より  
世の中よ住めるを。君の恩徳なり。それ

を忘きて猶不望を高くして。世をも  
君哉も恨むる人のみ侍る。以とうたて  
したとなり。竹馬鈔

論語を讀みて。父母小事へて。よく其力  
を清くし。君小事へて。よく其身を致す  
と何るを見てい。其如く親小事へて。我  
の身の力も。財の力も。をしまはして。孝  
を清くまべし。臣としてい。我が身を我

がものふせはくそ。私を忘き。専ら君ふ  
忠をつくまふ。大和俗訓

### 第六章

いとけなきより。心むんやさしくまな  
かある。友ふゆぐなり。かまそめふも。猥  
里ごをしく賤しき友ふ。近よるべのら  
ず。水い方圓のうつつもふ随ひ。人の善惡  
の友ふよるこいふと。誠なるかふ。川女今

善人ふ交ふれば。日々ふ善言を聞き。善  
事を見習ひて。益あり。悪人ふ交ふれば。  
日々ふ悪言を聞き。悪行を見習ひて。損  
あり。交ふ人を選ぶべし。大和俗訓  
朋友の間。禮あつぐれば争ひなし。喧嘩  
口論を。かならば無禮よりおこる。人ふ  
交ふるふ。禮義正しく慇懃ふまきば。人ふ  
我この間。やまふわりなくして。和ぎむ



つまじ。同上

伊川先生此のこまひしい。近世の風俗。友不交なるの道と知らざりて。多量心やすくあつるぎ合ひて。かどらしくおれを専らとほ。かやうふして相交ひる友い。互不狎ますぐる故ふ。やがてさむるなり。大和小學

横渠先生乃のたまひしを。今時の人。友

不交ひるを見るよ。巧み不媚びを。つらひて。人の氣ふいるやうなるものを。善きものありとて。入魂して。參會を。毎不。互不肩をうち。袂とごり合ひて。喜び笑ふといへども。かやうの交ひりを。義を以て交なるふあらざる故よ。何事ふよらば。一言も氣よ合はざるを。何事ば。やがて中惡しくあるなり。友不交ハ

るの道い。互ふあり下だり合ひて。始終  
をうつるぐ心なく。ほく。一むを要すべ  
しこそ。同上

朋友の交をりい。學文を講習して。友を  
會し。人の人たる道を論ト。互ふ相責む  
る。善を以てし。懇切ふ表裏ふく。勉め  
て心をほくし。ほめやあり導き。仁を輔  
け。徳を成すべし。朋友の義を以て交ひ

る故。深切ふ異見等ふ及びても。改めず。  
又ハ不可ふるまけあらば。交をりを絶  
つべし。日新館童子訓

人の隠すを聞き出だし。或ハ窺ひ見  
るべからず。ほく。懇意ふもなきもの  
也。廣く狎ま近づくべからず。何如かと  
懇意乃ものごても。辭を崩し交をるべ  
からず。さい奴僕の交をりふ等しきと

ふて。恥づべきとあり。朋友の善を責むるにて。異見いふを。人の道なれども。故なく人の過ちをいふ。愈々ならず。古き過失い。尚も更なり。戲言を多く。人の笑ひを催し。輕薄の容色すべし。財利のをふし。價の高下すべし。吾が好む事ふい。速く進む。好まざる事ふい。厭ひ倦きて。志をらくも耐へず。是等の事

はくしむべし。同上

友だちの交わりふ。心友面友の差別。情義の親疎。さほぐりこいへども。畢竟皆信の道を本とす。互の志し同しく。交わり親しむを。心友といふ。志しちのひぬまごも。筋目あるを。或は同郷隣家などにて。相交りて親しきを。面友といふ。心友面友ともふ。情義の親疎。同く

このほかに其ほごころの義理も従ひて威儀ややくよくあいきつ和愿ふして偽りなく勿論約束などの少くも違變なきが信の道の大體なり。翁問答

小學修身書卷之四

明治十六年五月十一日出板板權所有届

文部省編輯局藏板

定價金六錢壹厘